

明治初期における視覚教育メディア政策の 思想的背景に関する考察

生涯教育基盤経営コース 古屋 貴子

A Study on the Ideological Background about the Media Policy of Visual Education in Early Meiji Era

Takako FURUYA

The earlier studies about educational materials have mainly focused on textbooks used in schools. But, historically, not only books but various kinds of materials have been used as educational media in Japan. In this paper, I focus on “Kyoiku Nishiki-e”(educational wood block prints) used as a visual educational media in early Meiji era, and clarify their ideological background in the educational policy.

For that purpose, I pick out two persons, Tanaka Fujimaro and Nakamura Masanao that were both involved in early child education, women’s education, and home education at the time. I explore the connections between their educational ideas and “Kyoiku Nishiki-e” to come out the political meanings of these visual educational media.

目 次

1. はじめに
2. 明治初期幼児教育思想と教育錦絵
 - A. 田中不二麿, D.マレーの幼児教育思想と錦絵発行の布達
 - B. 「学制」における幼稚小学構想と教育錦絵
 - C. 明治初期の幼児教育施設
 - D. 教育錦絵と幼稚園教具(恩物)にみる幼児教育観の違い
 - E. 明治初期幼児教育における教育錦絵の位置づけ
3. 中村正直の女性教育思想と〈西洋器械發明家図〉
 - A. 中村正直の家庭教育観 — 幼児教育と母親の役割—
 - B. 〈西洋器械發明家図〉における女性表現
 - C. 〈西洋器械發明家図〉の詞書と『西国立志編』の叙述の比較
 - D. 〈西洋器械發明家図〉と中村正直の教育思想に共通する女性観
4. おわりに

1. はじめに

本稿は、明治初期に文部省が学校外で用いる視覚教育教材として制作・発行していた《幼童家庭教育用絵

画》と呼ばれる教育錦絵を、教育史における視覚教育メディア政策の一環として位置づけることを目的としている。《幼童家庭教育用絵画》は、「学制」が公布された翌年の1873(明治6)年から学校用教科書と並行して制作された錦絵であり、小学校就学前の子どもに対する絵解き教材として文部省製本所から100種余りが制作・発行されたことが確認されている¹⁾。このような学校外で用いることを意図された教育教材・教具は、教科書史の中でもその存在が僅かに言及されているものの、社会教育史研究においては本格的に研究されてこなかった。しかし、日本の近代教育制度の成立状況を解明するためには、教育錦絵を含めた学校内外の教育教材を総体的に把握する必要があるのではないだろうか。

以上の問題意識から、筆者は以前、教育錦絵を「教育的メッセージ」を視覚に訴えながら伝達する「視覚教育メディア」として捉える視点を提示し、教育史の中に位置づけなおす作業を行なった²⁾。《幼童家庭教育用絵画》は官公資料において直接言及されることは少なく、その制作の背景や目的、他の教育政策との関連も不明な点が多いが、以前の考察から、これらの絵図が幼児期の家庭教育用教材として制作され、学校教育と補完関係にありながら幼児教育政策、家庭教育政策とも関連するものであることを指摘した。

以上の先行研究での作業を踏まえ、本稿では《幼童家庭教育用絵画》と幼児教育、家庭(女性)教育との関連を、教育理念の側面から把握するための作業を行なう。具体的には、一連の教育錦絵の発行に関連のある人物の思想および教育構想が、錦絵の制作や描写にどのように反映されているのかを考察することを通じて、《幼童家庭教育用絵画》の特質を探ることとしたい。

本稿では、まず幼児教育政策との関連について、《幼童家庭教育用絵画》発行当時の文部大丞である田中不二麿を取り上げ、彼の幼児教育思想と教育錦絵布達との関連を考察する(2章)。続いて家庭教育との関連について、《幼童家庭教育用絵画》のうち〈西洋器械発明家図〉の挿絵の典拠となった『西国立志篇』の翻訳を手がけた中村正直をとりあげ、〈西洋器械発明家図〉に描かれた女性像と中村正直の教育思想の関連について、主に彼の女性教育・家庭教育観から探っていく(3章)。さいごに、《幼童家庭教育用絵画》を単に描かれた内容そのものを教授する教材としてではなく、以上のような教育思想を包摂した教育的メッセージを伝達する「教育メディア」として位置づけなおすことを試みる(4章)。

2. 明治初期幼児教育思想と教育錦絵

A. 田中不二麿、D.マレーの幼児教育思想と錦絵発行の布達

田中不二麿(1845～1909年)は尾張の藩校名倫堂に学び、1869(明治2)年に大学御用掛に任ぜられた後、明治13年まで一貫して新政府の文教行政に携わっていた人物である³⁾。田中は1871(明治4)年10月に文部大丞に任ぜられ、翌月岩倉全権大使一行に理事官として加わり、欧米各国を視察して諸外国の実状調査を行った。帰国後は文部省三等出仕、続いて文部省少輔、翌1874(明治7)年には文部大輔に昇進している。転任・兼任が多く、省務の役職が安定しない明治揺籃期の行政人事において、常に何らかのかたちで教育政策に関わってきた田中は、事実上唯一“責任をもって文教行政を処理して来た”⁴⁾人物であるとされており、教育施策の決定に与えた影響力として彼の教育思想を無視することはできない。

田中不二麿は欧米教育の移入に積極的であり、1871(明治4)年から1873(明治6)年にかけて欧米の教育事情を視察してきた成果を『理事功程』としてまとめ、欧米の教育に関する様々な規則の翻訳や施設状況を紹介

した。海外の幼児教育施設についても、後に“元来海外各国に於ては私設を主とし、殊に米国の如きは富豪の徒之が為に資を投じて、規模の完美なるもの甚だ多く、予は其实況を視察して、頗る有益なるを認めたり”⁵⁾と述べ、視察時から幼稚園教育の有効性について認識していた。

1875(明治8)年7月7日、田中は東京女子師範学校附属幼稚園開設之議の伺を太政大臣三条実美に提出し、日本への幼稚園教育の導入に本格的に乗り出した。「幼稚園開設之議」で田中は以下のように述べている。

“方今小学校の設立漸に加はり学齡子女就学の途相開け、授業の方法稍端緒に就き候得共独学齡未滿の幼稚に至つては、誘導の方其宜を得ざるが如く、教育の本旨に副はず頗る欠点と存候、因て這廻東京女子師範学校内に於て幼稚園を創置し、茲に幼穉の子女凡百人を入れ看護扶育以て異日就学の階梯と致度尤右費用は当省定額金を以て措弁可致候條別段仰裁可候也”⁶⁾

「学制」発布以来、小学校については漸次就学の途が開けつつあるが、学齡未滿の幼児については教育方法が定まっておらず、“教育の本旨”に沿っていない状態が憂慮されるので、東京女子師範学校に幼稚園を創設し、将来子どもが就学する際の“階梯”にしようというものである。“異日就学の階梯と致”の部分はこの建議の2年前に出された《幼童家庭教育用絵画》制作の布達で“他日小学就業ノ階梯トモ相成”(文部省布達第125号)と述べられていることと重なっており、田中の中では教育錦絵制作と幼稚園開設が学校教育へとつながる入門的位置づけとして同時に構想されていたことが伺える。

この田中の「開設之議」に対し、三条太政大臣は8月2日付の「伺之趣難聞届候事」で不許可としたが、同月25日付で田中は「再応伺」を提出し、翌月幼稚園開設は認可されることとなった。“当時幼児の教育は却つて有害無効なりとの反対説”⁷⁾があったなかで、繰り返し幼稚園の開設を上申していることから、田中は幼児教育政策に熱心であったといえよう。

こうした田中の幼児教育思想は、当時の文部省学監D・マレー(David Murray, 1830-1905年)の影響が大きい。田中とマレーは私的な生活においても親交を結ぶ⁸⁾など、極めて親密な間柄であった。田中はマレーの意見を教育政策に色濃く反映させ、マレーの意見の趣旨がそのまま政策として実施されることも少なくな

かった。たとえば、マレーは最初の申報において“欧米諸国ニ於テハ、女子ハ常ニ児童ヲ教授スル最良ノ教師ナレバ希クハ日本ニ於テモ亦、女子ヲ以テ教育進歩ノ媒ト為サンコトヲ”⁹⁾と述べ、女子教育の重要性や、女子師範の必要性を説いているが、申報が出された明治6年12月の翌月に、早くも田中は女子師範学校設立の建議(太政大臣三条実美宛)を出し、同月中に建議は認可となり、3月に文部省は東京女子師範学校の設立を布達している。このようなマレーと田中の政策実施について土屋忠雄は“まことに二人一体の教育施策”¹⁰⁾であったと述べているが、多くの部分で教育理念を共有しつつ、マレーと田中は彼らの教育理念を迅速に実行に移していったのだといえよう。

B. 「学制」における幼稚小学構想と教育錦絵

日本で最初に開設された幼稚園は、1976(明治9)年11月6日から保育が開始された東京女子師範学校附属幼稚園であるが、幼児教育施設の名称が初めて規定されたのは、1972(明治5)年の「学制」における「幼稚小学」であるといわれる¹¹⁾。「学制」では学校教育制度が大学、中学、小学の3段階として構成されていたが、「幼稚小学」は「小学」の部に正規の小学校である尋常小学校とともに、女児小学、村落小学、貧人小学、小学私塾と並んで規定された。実際には「幼稚小学」が開校されることはなかったが、「学制」第二十二章にある「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教フルナリ」という規定からは、今日的な意味での就学前の幼児を対象にした教育施設が構想されていたことが分かる。

「幼稚小学」での教育内容に関する規定は“小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教フル”としかないので、具体的な構想は定かではないが、小川澄江は、この幼稚小学の規定が契機となって明治政府が幼児教育の重要性を認識し、家庭教育における遊具についての方針を打ち出したとして、《幼童家庭教育用絵画》の制作に関する指示を出した文部省第125号布達を挙げている¹²⁾。ここでは、「田中不二麿の西欧幼稚園の視察」・「『幼稚小学』構想」→《幼童家庭教育用絵画》の制作、という政策の系譜が想定されているといえよう。

たしかに小川が指摘するとおり、田中不二麿の西欧巡視における幼稚園視察、「学制」における「幼稚小学」構想、《幼童家庭教育用絵画》の制作布達、がともに就学前の幼児に対する教育構想という点では軌を一にするものであったことは確かであろう。しかし、前者が

施設を前提とした西洋風幼稚園につながるものであったのに対し、《幼童家庭教育用絵画》は家庭での教育が前提とされ、初期幼稚園で用いられた教材とは趣向が異なるように見受けられ、当時の幼児教育における系譜はより複雑であったと考えられる。

C. 明治初期の幼児教育施設

実際、明治初期の幼児教育施設は、教育の対象者によって異なる施設が想定されていた。東京女子師範学校附属幼稚園が開設される以前にも、幼児教育施設はいくつか存在しており、それらは施設の由来や教育的性格から①キリスト教的・慈善的幼児教育施設、②フレール主義幼稚園、③託児所的幼児教育施設、の3種に分類できるとされる¹³⁾。

①は、1971(明治4)年にアメリカの女性宣教師によって横浜に開設された「亜米利加婦人教授所」で、当時主に遊女と白人との間に生まれた混血児の保護・教育を目的として設立されたものである。②は柳池幼穉遊嬉場という、1875(明治8)年に京都の柳池小学校に付設された公立の保育施設である。この施設は京都の人々の教育に対する熱意によって設立され、恩物を用いた本格的なフレール主義の幼稚園であったという。③は貧しい家の幼児や乳幼児の世話をしている児童に勉学の機会を与えるために設けられた「子守学校」と呼ばれる施設で、1875(明治8)年あたりから京都府や石川県をはじめ各地に設立され、昭和のはじめまで存続した施設である。

いずれも幼児の保護と教育を目的として設立された施設であるが、②が積極的な西洋幼児教育思想の実践の場として設立されたのに対して、①と③は貧民救済としての側面が強い点で②とは区別されよう。特に③は「学制」発布以来推進されていた就学督促のための「貧民ノ子女ヲ学ニ就カシムルノ法」の一方策として奨励されたものであり、学校教育の対象者を直接補完する意味合いが強い。

古木弘造は子守学校の設立目的を、“普通教育の徹底”“幼児教育の保全”“教化風俗の改善”“厚生の事業の振興”の4点にあるとし¹⁴⁾、長田三男は、子守学校は“単に初等普通教育機関としての機能ばかりでなく、一面親たちの生産労働の足手まといとなる乳幼児を保護する保育所(託児所、簡易幼稚園)としての機能、それに保育者養成機能的機能、社会教育的機能など四つの機能を合せ備えた特殊な施設”であったと指摘している¹⁵⁾。

一方、フレーベル主義に基づく西洋風幼稚園は、“幼児の家庭が富裕貴顕の子弟が多かった”¹⁶⁾と指摘されているように、実質的にごく一部の富裕層を対象とした幼児教育施設であった。したがって、同じ幼児用教育施設といっても、東京女子師範学校附属幼稚園およびフレーベル型幼稚園と子守学校とは、対象や成立過程が全く異なるといえるだろう。

D. 教育錦絵と幼稚園教具(恩物)にみる幼児教育観の違い

幼児教育の教育対象の違いは、施設形態だけでなく教材・教具にも見ることができる。当時の制度化された幼児教育としての幼稚園では、“児童中心の原理、自己活動の原理、連続発達の原理、労作の原理、個性の原理、社会の原理”¹⁷⁾などといった幼児の自主性を重んじるフレーベルの教育理論に基き、「恩物」と呼ばれるフレーベル自身が自分の教育理論に即して開発した幼児用教具が用いられていた。

「恩物」は幼児教育思想とともに明治初期に日本に紹介され、東京師範学校附属幼稚園においても、その指導方法の原理をフレーベルの教育理論に求めている¹⁸⁾。特に同園の初代監事であった関信三は、恩物について“保育科中ノ最モ高度ヲ占メルモノトス”“幼稚ノ性質年齢ニ応ジテ之ヲ施ストキハ、将来必ズ子女ノ栄果ノ成熟スルヲ期シテ待ツベキナリ”¹⁹⁾と述べて扱い方を具体的に提示説明するなど、教材としての「恩物」の重要性を主張している。

一方、同じく小学校就学前の幼児用教材として制作された《幼童家庭教育用絵画》には、フレーベルの教育理論の反映を見ることはできず、むしろ江戸時代の紙玩具が持つ要素を引き継いでいる。例えば《幼童家庭教育用絵画》のなかの〈器械体操組み立て図〉〈馬車組み立て図〉〈西洋人形着せ替え図〉は、描かれているモチーフは西洋のものだが、錦絵を切り抜いて着せ替え人形として遊んだり、切り抜いたパーツを組みたてたりして用いる玩具絵であり、これは江戸時代に組み立て玩具として一般に普及していた“立版古”²⁰⁾とよばれる娯楽用品の特徴を踏襲したものと捉えられる。

江戸時代のおもちゃ絵の値段は子どもの小遣いで買える程度の値段であり、封建社会体制が強固な身分社会のなかで社会馴化を促す教育用品としての機能を果たしていたとされる。教育が制度化されていない江戸時代において、おもちゃ絵は庶民が自ら制作・利用していた社会馴化のための教育メディアであったともい

える。これらを引き継いで制作された〈器械体操組み立て図〉〈馬車組み立て図〉〈西洋人形着せ替え図〉は、そうしたおもちゃ絵の教育メディアとしての有効性を認識した明治政府が、西洋文化の普及・浸透の目的から制作・頒布したものであると位置づけられる。

このように、同時期に同じく幼児を対象にして制作されたものでありながら、《幼童家庭教育用絵画》のなかの〈組み立て図〉および〈着せ替え図〉は、恩物型幼児教育とは異質のものであったと考えることができる。これらの教育錦絵は、外国の翻訳や保育事情の紹介が溢れるなかで、日本の保育理論を模索しつつ日本の実態に即して選択された教育方法の一形態と捉えることができよう。

E. 明治初期幼児教育における教育錦絵の位置づけ

明治初期の幼児教育政策においては、想定する教育対象や教育理念によって異なる施設や教材が構想されていたことを確認してきたが、以上から、子守学校、東京女子師範学校附属幼稚園、および教育錦絵の制作は、幼児教育政策の中でそれぞれ異なる系譜として位置づけることができる。明治初期の就学前幼児に対する教育政策を整理すると、次のように3つの流れを想定することができるだろう(図表1,参照)。

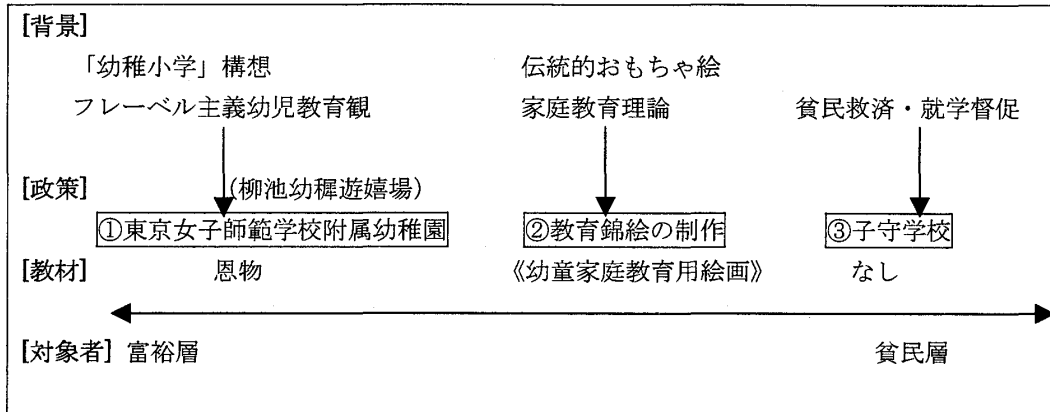
すなわち、明治初期において就学前の幼児を対象とした教育政策は、①フレーベル主義に基づいた西洋風幼稚園、②家庭での教育を意図した教育錦絵の制作、③貧民のための子守学校、の3つの流れがあったと考えられる。各流れが推進された背景には、幼稚園政策においては「学制」における「幼稚小学」構想が、教育錦絵制作においては家庭教育理論が、子守学校においては貧民救済・就学督促への対応が存在していた。

それぞれにおける対象者は、西洋風幼稚園では一部の裕福な子弟が想定され、逆に子守学校では貧民救済的見地から貧しい村落の幼児が想定されていた。両者がいわば社会的階層の両極に対応するものであったのに対し、教育錦絵はこれらの中間にあたる一般民衆を対象とするものと捉えられる。

また、それぞれ場で用いられた教材を比較してみると、西洋風幼稚園ではペスタロッチの開発した恩物が用いられ、子守学校では独自の教材自体が存在しなかった²¹⁾のに対し、教育錦絵では江戸時代からのおもちゃ絵の伝統を引き継ぎつつ、遊びと教育を兼ねた視覚的な教材が頒布されていた。

明治初期の幼児教育政策においては、背景にある教

図表 1. 明治初期の就学前幼児に対する教育政策の3つの流れ



育理論や対象となる幼児の階層によって用いられる教育メディアも巧みに選択されていたのであり、文部省発行教育錦絵はこうしたメディア教育の一形態として位置づけられるものであったといえる。

3. 中村正直の女性教育思想と〈西洋器械発明家図〉

《幼童家庭教育用絵画》と他の教育政策との関連は、錦絵という形態だけでなく、描かれた内容からも読み解くことができる。例えば同絵画のなかの〈西洋器械発明家図〉には何人かの女性が描かれているが、その描写からは明治初期における女性教育観が見出せる。

〈西洋器械発明家図〉はサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904年) の著 *Self Help* (1858年) を訳した、中村正直の『西国立志篇』(1871年) を典拠としている。*Self Help* は自助の精神に基いた偉人たちの成功を説いたものであるが、その内容は「立志伝の集成というよりも、一つの思想によってつらぬかれた処世論であって、道德教科書としての性格をもっている」²²⁾ ものであるとされる。『西国立志篇』は明治3年に翻訳出版され、福沢諭吉『西洋事情』(1866～1870年)、内田正雄『輿地誌略』(1870年) と並んで明治の三大啓蒙書のひとつに数えられ、「元來教科書として編纂されたものではないが、小学校における読物としても普及した著書で、学校を通じて果たした啓蒙書としての役割は大きいものがある」²³⁾ とされる。本絵図は『西国立志篇』の学校外への広がりを政府主導で行った施策として位置づき、明治初期教育施策における教育の「場」の捉えられ方を見るうえでも注目される。

A. 中村正直の家庭教育観 —幼児教育と母親の役割—

中村正直は明治初期に女子教育の重要性を主張して

いた教育思想家のひとりである。中村は明治初頭に「人民ノ性質ヲ改造スル説」²⁴⁾ 「善良ナル母ヲ造ル説」²⁵⁾ といった演説を行い、明治初期の日本が近代国家として確立するためには国家形態の変革ばかりでなく、「人民ノ性質ヲ改造スル」ことが必要であり、そのためには人間形成の基礎となる幼児期の教育に大きな影響を及ぼす「善良ナル母」の教育が必要であると主張していた。

幼児期の教育について中村は、幼児というものは生まれた時から「耳目ニ濡染シ身体ヲ圍繞スルモノ」の影響を受けて成長してゆくので、特に「修身敬神ノ教養」に関する教育は、「智識」の教育よりも先に「モラル及ビレリヂヤス(修正ノ教及天道ノ教)」(下線ママ) を施すことが肝要であるとして、家庭における道德教育の重要性について論じている²⁶⁾。

また、子どもの精神的善悪や習慣は母に似るものであるから、「開明」のための「善キ情態風俗」を形成するためには、「善キ母」「絶好ノ母」を得ることが重要であると主張する²⁷⁾。ここには、近代国家や近代文明を形成するための基礎として家庭の母を位置づけ、近代的国民の形成に果たす幼児教育者としての母親の役割を期待する中村正直の家庭教育観が現れているといえよう。

女性教育・幼児教育に対するこうした積極的な姿勢に共感したのが田中不二磨である。彼は女子教育振興に積極的だった文部省学監D・マレーの意見を受け入れ、1975(明治8)年に東京女子師範学校を設立し、中村に初代摂理(校長)になるよう請願している。さらにその後、中村と田中は同師範学校の附属幼稚園創設を共に積極的に推進してゆく。両者は折に触れて幼児教育・女子教育を重視する教育思想を共有する機会を有していたと思われる。

《幼童家庭教育用絵画》は制作の布達にもあるように、

教育の場として「家庭」が強く意識されていた。中村は「学校教育ハ既ニ第二義ニ落ツ故ニ学校教育ニ先ダツ所ノ父母家裡ノ教育ナルベカラズ、就中母ノ最善ノ教養ナルベカラザルナリ²⁸⁾」と述べているが、これは《幼童家庭教育用絵画》の制作を後押しする教育観を示すものといえる。《幼童家庭教育用絵画》に『西国立志篇』を典拠とする《西洋器械発明家図》が含まれていることから、中村正直が《幼童家庭教育用絵画》に何らかの形で関与していた可能性が推測される。

B. 《西洋器械発明家図》における女性表現

《西洋器械発明家図》は中村紀久二の所蔵調査により現在15種が確認されており²⁹⁾、各絵図には短い詞書(エピソード)と共に一人の偉人が紹介されている。とり上げられている人物は全員男性であるが、これらの錦絵には彼らを取り巻く人物として妻・叔母・恋人といった女性たちが描かれている。取り上げられている人物、『西国立志篇』における掲載個所、および女性の描写については図表2の通りである。

各絵図は『西国立志篇』の記述の中から一部を抜き出して絵画化したものであり、添えられている詞書は『西国立志篇』の記述と大部分が対応している。15枚の絵図のうち7枚が女性に関連のある詞書であるが、これは『西国立志篇』全体の記述から見ると非常に比重が

大きく、明らかに女性に関係のある部分を意識的に選んでいるように見える。

女性に関するエピソードが書かれている詞書としては以下のようなものがある。

《ワット》(図1)

“英国の瓦徳は蒸気機器を造出さんとして土瓶の口より出る湯気の水に成たるを七にて一滴つゝ計り居たりしを叔母其無益の事に時を費すを噴りしか遂に機関を發明し数多の功をあらはせり”

《アークライト》(図2)

“英国の阿克来は紡棉機を造るに数年心を苦しめて家貧くなりたるを其妻其功なくして徒に財を費すを憤り雛形を打碎きければ阿克来怒りて婦を逐出しぬ其後機器成就して大に富しとぞ”

《ウィリアム・リー》(図3)

“英国の維廉李は一の少女を愛恋して数、其家に往きしに常に襪を織りて顧ざりしかば李はこれを憤り如何にもして彼の工業を妨げんとて三年の間工夫し竟に新機械を造り出して大利を得しとなり”

《ジョン・ヒースコート》(図4)

“英国の戎喜斯可土は綿帯とて婦人の飾に用る網の如

図表2. 《西洋器械発明家図》で取り上げられた発明家および女性の描写

とり上げられている人物	『西国立志篇』掲載個所	女性の描写
ワット (蒸気機関)	第2編-8	叔母
アークライト (紡織機)	第2編-10	妻
ピール (印花草機)	第2編-11	女子 (家族)
ウィリアム・リー (綿器械)	第2編-12	少女 (恋愛対象)
ヒースコート (綿帯織機)	第2編-13	妻
ウェッジウッド (陶器)	第3編-4	—
レイノルズ (芸業)	第6編-1	—
ボーカソン (自鳴鐘)	第2編-14	—
ヘイルマン (綿花器械)	第2編-15	女兒 (家族)
パリシー (磁器)	第3編-2	妻子
オードゥボン (禽鳥画)	第4編-12	—
カーライル (写本)	第4編-13	—
フランクリン (電気)	第5編-9	—
ベドガー (磁器)	第3編-3	—
ティッツィアーノ (人物画)	第6編-4	—



図1ワット（蒸気機関）
（国立教育政策研究所附属教育図書館蔵）



図2アークライト（紡綿機）
（国立国会図書館蔵）



図3ウィリアム・リー（織襪機）
（国立教育政策研究所附属教育図書館蔵）



図4ヒースコート（綿帯織機）
（国立国会図書館蔵）



図5パリシー（磁器）
（国立教育政策研究所附属教育図書館蔵）

き物を織る機器を造らんとして数度の試験に貧しくなり其妻憂ひ歎きしが一日シヨン欣然として一条の網の様なる物を持帰り婦にあたへ乃ち機器の成就せしなり”

〈パリシー〉(図5)

“フランス 国^はの^{パリ}西^はは其^の国^の磁^器の粗^{なる}を見て精^品を作らんとて数^度の^経験^に店^架椅^子ま^ても^焚尽^しけ^れば^妻子^は発^狂せ^しと^嘆き^しが^遂に^此火^力に^より^て薬^料始^て焼^付其^功を^成したり”

や嘆きにもめげず偉人が成功を手にするというエピソードがサクセス・ストーリーの典型として示されている。これらの大部分は『西国立志篇』の本文を部分的に抜粋・要約したものであるが、中には内容を改変したもの、あるいは『西国立志篇』の本文全体から見ると、各偉人の発明に最も関わりの深いエピソードとは思えない部分の引用などが見受けられる。

上記の詞書では、いずれも妻や叔母の「愚かな」怒り

C. 〈西洋器械発明家図〉の詞書と『西国立志編』の叙述の比較

例えば、ワット(瓦徳)を描いた絵図(図1)では、匙を使った蒸気の実験をしているワットのことを叔母は無益だと不満をこぼすが、それに屈することがなかったワットは発明を成就させ成功を取めた、といったエピソードが記されているが、『西国立志篇』の本文にそのようなストーリーは載っていない。例えば「ジェームス惹迷士ワット瓦徳ノ勤勉并ビニ心思ヲ用ヒテ習慣トナレル事」の部分では以下のように記述されている。

“瓦徳ハ最モ勉強勞苦セル人ト称スベシ ソノ生平ノ行跡ヲ觀ルトキハ絶大ノ事ヲ成シ、絶高ノ功ヲ取ルモノハ、天資(ウマレツキ)大氣力アリ大才思アル人ニハ非ズシテ絶大ノ勉強ヲ以テ極細ノ工夫ヲ下シ習慣経験ニヨリテ技巧ノ智識ヲ長ズル人ニアルコトヲ知ルベキナリ(中略)就中ソノ心志、尤モ恒久忍耐ニシテ、真証実験ヲ求ムルコトヲ以テ務メトシ、又常ニ勤テ心思ヲ用フルコトヲ習ヒ養ヘリ義地活十ノ説ニ「人々才智ノ齋カラザルハ、大抵ハ心思ヲ用フルコトヲ幼時ヨリ習ヒ養ナハザルニ関係スルコトナリ」ト云ルハ、確論ト為スベシ”³⁰⁾

ここでは、ワットが成功を取めたのは彼の生まれつきの才能によるものではなく、“絶大ノ勉強”“極細ノ工夫”などの“習慣経験”を身につけたからであると述べられ、“恒久忍耐”“真証実験ヲ求ムル”姿勢や“勤テ心思ヲ用フル”努力が大切であるとされている。これはまさに『西国立志篇』で中村正直が人々に伝えたかった徳性であり、続くヘッジワースの引用部分にある“幼時ヨリ習ヒ養ナハザルニ関係スルコト”というのとは、『幼童家庭教育用絵画』の制作布達で強調された幼児教育の重要性と重なる。なぜ本絵図ではこうした部分を引用せずに叔母に関する架空のストーリーを記載したのだろうか。

続いてアークライト(阿克来)を描いた絵図(図2)をみると、紡棉機の開発のために家が貧しくなってしまったことに怒った妻が雛形を破壊してしまったが、そんな妻を追い出して開発を続けたアークライトはその後成就して多大な財産を手にしたと書かれている。『西国立志篇』の本文では、確かに“錢財ヲモ使ヒ盡クシテ赤貧ニ至レリソノ妻ソノ夫ノ勞シテ功ナク徒ニ財ト時トヲ費コトヲ見テ憶惱ニ堪ヘズ一日怒リニ乗ジ機器の様子ヲ破碎シケレバ阿克来大ニ怒リ、ソノ婦ヲ逐

ヒタリケリ”³¹⁾という部分があるので本文に基づいた詞書であるといえるが、同文中に“紡棉機ヲ造リシトキ、人民騒乱シテ、ソノ器ヲ毀チケリ”³²⁾とあるように、発明に理解を示さなかったのは妻だけではない。また、“阿克来天性勇毅ニシテ世務ニ應ズルノオアリソノ処々ニ工場ヲ建テシ時ニ当リ或ハ暁四時ヨリ夜九時ニ至ルマデ勉勞シテ休マザリケリ”³³⁾といった部分のほうが、勤勉などの徳目を説くのに適切であろう。

ウィリアム・リー(維廉李)を描いた絵図(図3)では、恋した少女が振り向いてくれないことに憤慨したことをきっかけに発明に打ち込んだウィリアムが、3年後に新器械を発明して“大利を得し”とあるが、『西国立志篇』の本文では、新器械を発明したウィリアムはロンドンで女王に機器を売り込むも“一語ノ獎賞”も無く、フランスでは異国人であるために“絶ヘテ顧ミル人モナク、極貧ニ迫リ、愁苦ヲ積ミ、幾何モナク没セリ”³⁴⁾とあるように、不幸な最期を遂げたとされている。

このように、〈西洋器械発明家図〉における詞書には『西国立志編』にはない部分や記述を歪曲して表現する部分が見られるのである。

D. 〈西洋器械発明家図〉と中村正直の教育思想に共通する女性観

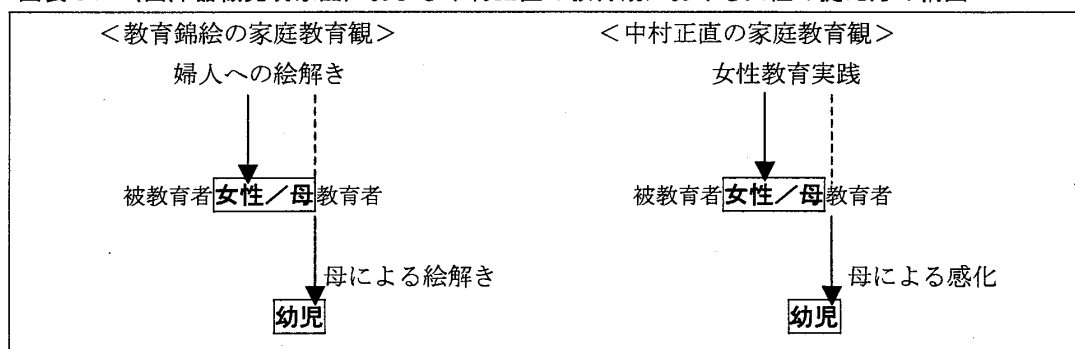
これらのエピソードの選択・改変は、この絵図が就学前の児童を対象とした家庭用教材でありつつ、同時に家庭における女性がその教育対象として想定されていたためになされたものと考えられる。すなわち、これらの絵図を手にする婦人は幼児に教え聞かせる「教育者」であると同時に、自身が良き母・妻としてのあり方を説かれる「被教育者」でもあるのである。

こうした女性に対する多面的認識観は中村正直の女性教育観の中にも見出せる。小川澄江は、中村正直が唱えていた「女性教育の人間教育的視点」を以下の3点にまとめている³⁵⁾。

- 1) 優れて幼児教育を担う善母
- 2) 夫を内助して国家の発展ないし福祉をもたらす良妻
- 3) 近代国家を担う国民としての女子自身の資質の向上

これを〈西洋器械発明家図〉の対象となる女性に当てはめると、1)は幼児に絵解きをする善母としての女性、2)は絵図から学んで夫を助ける良妻としての女性、3)は1)と2)を実践するために自ら学ぶ学習者としての女性³⁶⁾、と捉えられよう。

図表3. 〈西洋器械発明家図〉および中村正直の教育観における女性の捉え方の構図



ここで注目すべきは、子どもと婦人を同時に絵解きの対象とする〈西洋器械発明家図〉の描写は、幼児教育と女性教育を一体のものとして捉えていた中村正直の家庭教育思想と同一の構図をとっているということである。すなわち、幼児に対する道德教育と、それを支える母としての女性に対する女性教育という、二重構造として家庭教育を捉えている点、あるいは、教育者・被教育者という二重の立場で家庭における女性を捉える視点において、〈西洋器械発明家図〉に現れた教育観と中村正直の教育観は同一の構造をなしていると考えられるのである(図表3参照)。

〈西洋器械発明家図〉には子どもを教育する母親の姿は直接描かれてはいないが、錦絵の制作自体が幼児教育者としての母を想定していたことを示しており、さらにそこに女性の慎むべき姿を描き込むことで、同時に女性自身への教育をも達成しようとしていたのだといえよう。

〈西洋器械発明家図〉の制作に直接誰が関わったのかについての資料がない以上、中村が『西国立志篇』のどの部分をどう絵画化するかを直接指示したと断定することはできない。しかし一方で、中村は東京女子師範学校で自助論に関する講話を週1回開いており、『西国立志篇』を教材にした女性教育を実践している。当時中村の講話を受けた山川菊栄は、女子師範学校での講話について、“そのころは修身とか倫理とかいう課目はなく、一週一回中村先生の講話というのがそれに当り、(中略)講話の材料はおもにスマイルズの『自助論』によりました。”³⁷⁾と回想している。

ここから、中村のなかで『西国立志篇』と婦人教育が強く関係付けられていたことは明らかである。日本の近代国家を支える自主自立の人民の形成を目指し、そうした人民の形成のために大きな役割を果たすものとして、幼児教育およびその幼児教育を担う女子教育を捉えていた中村にとって、《幼童家庭教育用絵画》は東

京女子師範学校摂理就任と合わせて、中村自身の幼児教育・女子教育の奨励・普及を实践する絶好の機会であったに違いない³⁸⁾。前述した田中不二麿との親交関係も鑑みるならば、中村が《幼童家庭教育用絵画》の制作に関わった可能性は十分ありうる。だとすれば、本絵図における独特の女性の扱われ方は、自らが翻訳した『西国立志篇』に中村独自の女子教育観を加味したものが反映されたものであると捉えることができるだろう³⁹⁾。

4. おわりに

本稿で考察してきた教育錦絵と幼児教育、家庭(女性)教育との関連性は、田中不二麿と中村正直の教育思想との関連把握を中心とするものであり、対象が限定的であるとともに、多くの点で推測の域を出るものではないという限界をもつ。しかしながら、文字資料の分析が中心的であった従来の教育史研究において、錦絵という教材のメディア形態に注目し、描かれた内容から教育思想を読み解く分析視点を提示することは、研究方法の可能性を広げるという点で意義のあることであると考えられる。

今回の考察では、描かれた内容そのものを教授する教材であると同時に、種々の教育思想や構想を反映し伝達する「教育メディア」として教育錦絵を捉えることで、近代教育制度の整備途上であった明治揺籃期において、幼児教育・婦人教育・家庭教育としての機能を担いつつ学校教育を補完するための「メディア戦略」ともいべき教育メディア政策のひとつのあり方として教育錦絵を位置づけた。

とはいえ、教育錦絵はそうした教育メディアの一例にすぎない。教育メディア政策という視点から教育史を紐解いていくには、より多様なメディアに視野を広げつつ考察を続けていく必要があるだろう。

(指導教官 鈴木真理助教授)

註

- 1) 《幼童家庭教育用絵画》は、住居の造営工程や関連する職業・道具等を図示した〈衣喰住之内家職幼絵解之図〉、稲・茶・蕨・杉・蚕といった日本の伝統的な農業・産業の工程や利用法を示した〈農林養蚕図〉、子どもをとりまく道徳や倫理を説く〈教訓道徳図〉、西洋の発明家の伝記を示した〈西洋器械発明家図〉、数や度量衡の測量単位・器具および貨幣を図示する〈数理図〉、初歩的な力学を図示する〈木槌・滑車図〉、〈空気・浮力図〉、子どもに運動の意義を伝える〈幼童絵解運動養生論説示図〉、西洋をモチーフにした組み立て式・着せ替え型の玩具絵〈器械体操組み立て図〉、〈馬車組み立て図〉、〈西洋人形着せ替え図〉など描かれている内容は多岐にわたる。中村紀久二「幼童家庭教育用絵画 解題」佐藤秀夫・中村紀久二編『文部省掛図総覧2』、東京書籍、1986年、pp.3-9.
- 2) 古屋貴子「明治初期の視覚教育メディアに関する考察—教育史における文部省発行教育用絵図の位置づけをめぐる—」『生涯学習・社会教育学研究』第31号、2006年。
- 3) 田中不二磨に関する詳細は、西尾豊作「子爵田中不二磨傳」(伝記叢書19)大空社、1987年。によった。
- 4) 土屋忠雄「明治前期教育政策史の研究」講談社、1962年、p.165.
- 5) 田中不二磨「教育瑣談」大隈重信撰、副島八十六編『開國五十年史上巻』開國五十年史發行所、1907年、pp.733-734.
- 6) 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』東洋書店、1934年、P.31.所収
- 7) 田中不二磨、*op. cit.*, p.733.
- 8) 田中不二磨の子息である田中阿歌磨は、父に関する回顧録の中で“モルレー一家と私の家との間に於いては極めて親密な交際がされていた”と述べ、両家の家族ぐるみの交際について記述している。田中阿歌磨「田中不二磨と明治初年の文教行政」『文部時報』第730号(文部省創置七十周年記念特輯)、pp.105-111.
- 9) 「ダウキット・モルレー申報」明治6年(明治文化研究会編『明治文化全集(教育編)』第18巻、日本評論社、1928年、p.129.所収)
- 10) 土屋忠雄、*op. cit.*, p.185.
- 11) 倉橋惣三・新庄よしこ *op. cit.*, p.6.
- 12) 小川澄江「東京女子師範学校附属幼稚園の創設と中村正直の幼児教育観—東京女子師範学校附属幼稚園創設以前の幼児教育を中心に—」『国学院大学栃木短期大学紀要』34号、1999年、p.31.
ただし、小川の指摘には時系列上の疑問も残る。田中不二磨が欧米を巡視したのは1871(明治4)年11月~1873(明治6)年3月で、「学制」発布当時、田中は日本には不在であった。一方、文部省布達第125号は田中が帰国してからわずか半年後の10月6日に出され、田中はこの布達を自身の名で諸府県に同日付で送付している。このことから、「家庭教育用絵画」制作の布達は「幼稚小学」よりも田中の西欧巡視のほうが直接の契機であったといえよう。
- 13) *Ibid.*, p.32.
- 14) 古木弘造『幼児保育史』巖松堂書店、1549年、p.76.
- 15) 長田三男「子守学校の実証的研究」早稲田大学出版部、1995年、pp.27-28.
- 16) 倉橋惣三、新庄よしこ *op. cit.*, P.52.
- 17) 莊司雅子『改訂幼児教育学』柳原書店、1964年、p.24.
- 18) 附属幼稚園設立のための理論的、実際の推進者であった東京女子師範学校摂理中村正直は、附属幼稚園の設立にあたって、フレーベルの保育理論に詳しい松野クララを同園に迎え、主任保姆には「フレーベル氏ノ幼稚園ノ事ヲ了解スル婦女ヲ得ルコト最モ肝要ナリ」と述べている。中村正直訳稿「ドウアイ氏幼稚園論ノ概旨」(『日々新聞雑報』明治9年11月18日、倉橋惣三・新庄よしこ、*op. cit.*, p.43.所収)
- 19) 関信三纂輯『幼稚園法二十遊戯』明治12年(明治文化研究会編『明治文化全集(教育編)』*op. cit.*, p.549.所収)
- 20) 立版古については、山本駿次朗『立版古：日本の切りぬく遊び』誠文堂新光社、1976年。およびINAXギャラリー企画委員会『立版古：江戸・浪花透視立体紙景色』INAX、1993年。などを参照。
- 21) 子守学校では幼児の世話で学校に行かれない子どもたちに教育を受けさせることに主眼が置かれていたため、幼児は専ら子守学校附属の託児所に預けられる対象であり、特に幼児用教材は想定されていなかった。
- 22) 「所収教科書解題」海後宗臣・仲新編『日本教科書大系 近代編 第一巻 修身(一)』講談社、1961年、p.596.
- 23) *Ibid.*, p.596.
- 24) 中村正直「人民ノ性質ヲ改造スル説」『明六雑誌』第30号、1875(明治8)年2月。
- 25) 中村正直「善良ナル母ヲ造ル説」『明六雑誌』第33号、1875(明治8)年3月。
- 26) *Ibid.*, 1丁。
- 27) *Ibid.*, 1丁。
- 28) 中村正直「人ノ一生ハ幼児ノ教育ニ在ルヲ論ス」(『大日本教育会雑誌』大日本教育会事務所、第14号、1983(明治17)年12月31日.)
- 29) 中村紀久二、*op. cit.*, p.6.
- 30) 斯邁爾斯著、中村敬太郎譯『西國立志編 原名自助論 第二冊』雁金屋清吉、1871年、5-6丁。
- 31) *Ibid.*, 9丁。
- 32) *Ibid.*, 9-10丁。
- 33) *Ibid.*, 10丁。
- 34) *Ibid.*, 13丁。
- 35) 小川澄江「中村正直の教育思想」(私学研修福祉会平成15年度研修成果)2005年、p.333.
- 36) 中村正直に師事していた山川菊栄によれば、“覚えているかぎりでは『良妻賢母』という熟語は中村先生がはじめてつくられたもの”であるが、“この時代に女子の文盲に反対して教育、特に高等教育を与える意味の良妻賢母を主張したことは、明治中期以後の、女子の高等教育に反対する意味の良妻賢母主義ではなく、そこに封建主義の文盲主義を打破しようとする積極的な意味がふくまれていることを見なければなりませんまい。”と述べている。山川菊栄「おんな二代の記」『山川菊栄集9』岩波書店、1982年、p.32. ここからは、よき母よき妻としての女性観だけではなく、自ら学び判断する女性観が表れているといえる。
- 37) *Ibid.*, pp.29-30.
- 38) 当時、女子教育については中村だけでなく福沢諭吉、森有礼な

どの啓蒙知識人らも同様に論じているが、彼らの女子教育論は必ずしも実践の裏づけを有していなかったのに対して、中村の場合は東京女子師範学校や幼稚園の開設などの実践を通じて、自ら女子教育を推進していた点に教育史的意味があるとされる。その意味では、〈西洋器械発明家図〉の配布は教育絵図を通じた女子教育の実践といえるだろうし、中村にとっては直接の翻訳である『西国立志篇』よりも選択や改変が可能な本絵図は、より自身の教育観を反映した実践が可能であったといえるだろう。

- 39) こうした教育理念を包含した『西国立志編』の絵画化は、当時「自助・自立」を説くものとしてベストセラーとなった同書が、どのように人々に普及・浸透したのか(あるいはさせられようとしていたのか)を知る上でも重要である。鈴木眞理は、“『西国立志編』を、社会教育上の基本文献と位置づける際には、それが人々にどう読まれたかを検討することが最重要であろう”としたうえで、“口伝てに文字の読めない層にまで浸透していったともいわれる”『西国立志編』が、“いわゆる立身出世のハウ・ツー物として受け容れられた背景には、原文の正確な理解の困難さや、それに起因する口伝えなどによるダイジェストの際の主旨の非明瞭化あるいは転換なども、ひとつの要因として存在したのではないか”と述べているが、〈西洋器械発明家図〉はそうした文字の読めない層も視野に入れた絵解き教材として捉えられることから、そこに込められた教育理念を読み解くことは『西国立志編』の受容の実態を明らかにする上でも意義のある作業であるといえるだろう。鈴木眞理「スマイルズ著・中村正直訳『西国立志編』」確井正久編『人間の教育を考える・社会教育』講談社、1981年。